

『原稿を依頼する人される人―著者と編集者の出会い』

高橋輝次（編）／燃焼社／2,300円＋税／1998年

本当に必要な言葉

坂田三允（長野県看護大学）

類は友を呼ぶというが、私の知人には夢見がちの変人が多い。一編の作品も書いていないのに、芥川賞の受賞の弁を書くための机を持っている人。出版の目処もないまま、いくつかの賞の受賞を辞退する弁まで、しっかり書き上げている人。かく言う私も、トリックも何も思いつかないのに、推理小説で獲得するはずの懸賞賞金の使い道だけはいつも夢想している。もちろん、知人のその机は物置になっていることを私は知っているし、受賞辞退の弁の送り先もまだない。そして私の財布はいつも軽い。けれども、世の中には毎年芥川賞を受賞する人がおり、多額の賞金も受け取られている。夢を見ているだけで終わってしまうに違いない私たちと、実際に作品を完成させ世に送り出している人たちとはどこが違うのだろう。そんなことを思いながらこの書を読んだ。

この書は、現在活躍中の作家、評論家、学者、そして編集者が、それぞれ心に残る出版の裏話を記したものである。副題に「著者と編集者の出会い」とあるように、両者の関係のあり様に主眼が置かれているが、それぞれの著者が、とても率直にみずからのことを語っていて、そのひとつひとつが実に味わいの深い読み物になっている。と同時に、昭和初期からの出版にまつわる歴史も読み取れるし、書物、あるいは文芸というものの役割についても考えさせられる。

実はこの書は、私がみずから求めたものではない。「原稿のメ切は守ろう」という意地悪なメモとともに某編集者から送られたのである。エ

ッセイは、詩人であり、評論家でもある松永伍一氏のものから始まる。氏は『『書けないからメ切を延ばしてくれないか』と頼んだことは四十年来一度もないし、おおむねメ切前に書き上がっている』そして「編集者に余計な苦勞をかけないように心掛けていて、その思いと態度はいつも変わらない」と言う。この書の送り主は、ここをこそ読ませたかったに違いないと半分ひがみつ、心掛けと思いが行動につながらない私は、じっと頭を垂れるしかない。

シナリオライターになりたいと思い立った藤本義一氏は、「とにかく懸賞ラジオドラマの脚本を書き続けた。一年半の間に七十本を書いて応募した」と言う。それが書ける才能と努力を両方とも持ち合わせていない私の財布が軽いのは、当然のことだ。そこで私は小田晋氏（筑波大学名誉教授）の「今日のところはこういう原稿でお茶を濁しておいて、この次は編集者が仰天してくれるような本番をと思っていながら、森鷗外が『そうして明日は永遠に來ぬのである』と書いている通り……筆者のライフワークだと思って抱え込んでしまうと、それだけに却って気が重くなっていつまでも取りかかれぬ」という言葉に一筋の光明を見出す。しかし関井光男氏（近畿大学教授）の「エッセイであれ随筆であれ、埋め草やコラムであれ、それはなぜ必要なかを問わなければならないだろう」という厳しい姿勢には身を縮ませるしかない。

本当に必要なことを、私は書いているのだろうか。 ▲



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科婦長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。